

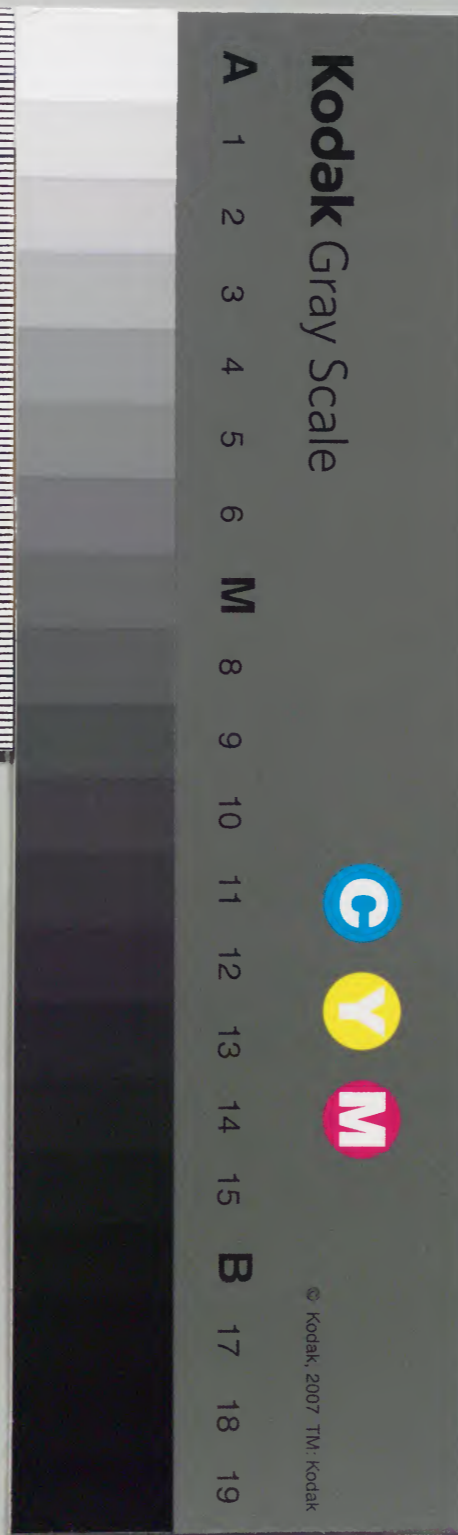
小窓閑話

和書冊

和書門	一八八	一八八	一八八	一八八
類	四	四	四	四
函	四	四	四	四
架	四	四	四	四
冊	四	四	四	四

內閣文庫	和書	一八八	一八八	一八八	一八八
類	書	四	四	四	四
號	冊	四	四	四	四
架	函	四	四	四	四

內閣文庫	
番號	和 18884
冊數	4 (2)
函號	213 46



年の新穀と神（まん）の供（く）をうけしは神奉（まん）とて
 天子（てん）と海（うみ）の神奉（まん）とてみよ（みよ）の存（ぞん）新米（ま）とて
 くらひにひかすを廢人（まよ）もはは祭（まつり）のけり新米
 と食（く）とふあり志（し）ありん人と海（うみ）の神奉（まん）とて
 新米と食（く）とて
 ⑤出羽國吹浦（ふ）村（むら）のきふふ雨（あめ）後雷（のり）のけり神
 炎（あ）の根（ね）とてと降（ふり）とて土人（どじん）のいりて乞（ねが）へ神
 軍（い）ありとて室中（むろ）よりけりとてとてありとて
 田川郡（たがわ）の内井（うちい）れ岡山（おかやま）版蓋山（ばんがいざん）よりけり
 ありとて形（かたち）とての灘（な）形（かたち）奇瀝（きり）の形（かたち）大さくは

うり之寸余（すん）ふと其色（そのいろ）白黒赤（しろくろあ）灰（はい）多（おほ）ふと
 中（ちゆう）を教（しやく）のくらしけ形（かたち）とてとてとてとてとて
 去（ま）れく（く）とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 為（な）ふとけりとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 人（ひと）是（こゝ）とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 揚（あ）ふと續（つづ）日本（にっぽん）後（ご）紀（き）本（ほん）六年（ろくねん）九月（くがつ）の條（じょう）曰（いは）乙丑（おつしう）出
 羽（あ）出（で）言（ご）去（ま）八月（はつげつ）廿九日（にじゅうくにち）管田川（かんたがわ）郡（ぐん）日（ひ）解（か）云（い）海（うみ）那（な）西（さい）溪（き）達
 府（ふ）之（の）程（ほど）立（た）十餘里（じゆじゆり）自（よ）本（ほん）無（な）石（いし）而（して）後（ご）月（げつ）三日（さんじつ）霖（りん）雨（う）無（な）止（と）雷
 電（でん）國（こく）声（せい）經（きやう）十餘日（じゆじゆじつ）見（み）晴（せい）天（てん）時（とき）向（むか）海（うみ）畔（べん）自（よ）然（ぜん）隕（いん）石（いし）其
 數（かず）不（な）少（せう）或（ある）似（に）游（ゆう）或（ある）似（に）海（うみ）或（ある）白（しろ）或（ある）黑（くろ）或（ある）青（あお）赤（あか）凡（おほ）其（その）壯（さう）體（たい）

小窓閑言 卷之二

旧河ふ元見乎 南朝の花山院右近清大將長親藤
 發しつね魏くつよま方あり出人と妙喜く深まらふ
 ありつね 旧魏荒し 即入本書ふんるん 想ふ
 漂泊しつね 野原ふまなり 妙ひまらうく 終りありと
 公事山河古言れ 神社の言ふ 藤ふつ 明魏のやうを
 のふありつね 公事山神社と 波古言社と 絲一 彼
 古より 法彦也 三代 実源貞觀元年 上野 公正 五位上
 波古言の 神社 五位下 之 慶三年 閏十月 官 授
 從五位上 波古言神 正五位 同 四年 五月 廿六日 授 正
 五位上 勳 十二等 上 一宮 巡 諸 記 上 野 出 妙 喜

村法 收 坊 方 力 堂 正 面 あり 波古言神社 右 倉 に
 あり 今 末 社 の あり 又 土 人 の あり あり
 出社 じつ 正 面 あり 今 借 居 あり たり たり
 たり たり 清 多 乃 地 主 の たり たり 存 人 明 魏 也
 妙喜 とも や 中 り 又 天 伯 とも 事 實 あり
 ① 末 家 明 浩 とも 古 記 あり 年 を たり たり たり
 一 歳 あり たり たり たり たり たり たり たり たり
 一 少 中 たり たり たり たり たり たり たり たり たり
 西 渡 とも 二 区 たり たり たり たり たり たり たり たり
 古 記 たり たり たり たり たり たり たり たり たり

小窓龍言 卷之三

10

くふくふと今ふりては風俗せしむ

④ 漁会將軍家の庭敷造り寝殿あり母屋廊中

廊中門侍を侍あしりしとありしと見えん

たゞ此ふれ事も室町家の如し一室しり

書院しりしものも古記書物ふはるるに去園と

しりし庭より下りて世ふ古事あり今も

世ふ去園といへるに作音の中侍の事ふや

たもつ家 ⑤ 旅りの由かき宿へ是らには先方角と云

ちる案内おらじ宿所のあり事と云く見届く

カクナは後とて信既辨り知術と無法と云

誤かりと書しハ亦り文字と知る事なほ

⑥ 書物と思ふにけりし事とにりし事と云

凡そとてしと知る事と云くしりし事と云

まのぐさふりし事と云くしりし事と云

⑦ 放馬の試しりし事と云くしりし事と云

乃中島おらふ侍人素と云くしりし事と云

人小談合さるる事と云くしりし事と云

しりし事と云くしりし事と云くしりし事と云

源氏物語 卷之三

三

島乃ちつらき浪はなかり
 ① 軍物積りたるはし浪不舟命とあり
 あもハ歌味家おもひもよらし人お命とたがし
 江戸よりしし様しとふ事とつみあやとふ
 しろハ様しとふ事たり様もは鼻の白く
 なるなり源氏も浪ふおくしとふとふしちり
 人多くしと身之くしと
 ② 犯者乃出浦麻郡と卑戦の人多くハ城麻
 乃必ししと他國の人とまると毎ふちり様
 ぶふ是う形うも浪ふふあしとふとふは

久ゆきりりりしと奇ハ美しと詣りぬと
 小たのしみ篇と橋らとふとよふ禮とふれむ
 心あると
 ③ 俗ふし食のさひの事とありとつらと
 けや物清浄女とくしとあふもくしと
 ④ 様弓ハ梓の本とつらとつらハ禮乃本とつら
 似れふらありとつらとつらとつらとつらと
 檀れ洲の中とつらとつらとつらとつらと
 づゆみとつらとつらとつらとつらとつらと
 ⑤ 夫石のまのまは石しとつらとつらとつらと

島乃より海舟より

⑤ 古に軍物積りたるは海舟に命をたすべし

あるは欲味家おとしむらうはか命をたすべし

即ちよりいへば積りたる事とすべし

しうは積りたる事なり積りたるは命の白く

なるあり源氏も海舟なくしうは命をたすべし

人多くしうと見くしう

⑥ 肥後乃出師麻郡と卑戦の人多し

乃出師いしうり他國の人多しと見くしう

あふ是りわらうも海舟ふありしうは命をたすべし

郡の者ぐんよりぐんとくふし川もは和者

なり丹波とよハ秋波とふハ茶とらふ茶を

とよふし川もくしう又万葉集より古歌

海舟は名もよとよとよとよとよとよ

⑦ 神武記曰男軍女軍とあるハ正兵奇兵と

進も備もの事なりとあり

⑧ 近江の國守山ハ今ハ山といえしと作書ハ

もふ山といしりもあやもふ山と漢る古奇多し

⑨ 渡唐大神の畫叙の漢あり伝用しり

えれあり是うけりて管神ふらありうさ
程波津ふぶへさくや出この池いけをこりて今とるふな
さくや出この池いけと海うみと 百濟ひやくさいの王おう仁にん乃の像ぞうかき
しと或人あるのいへる

○字あ麻ま呂りょと凡ひ流りゅう浦ぼの本もとなり彼か百ひやくハハ素す盞さん
尊の神かみありしふ知しやあまへ通とほり
河か多たしとり少せう事じの名なありと左ひだり席せき並なら松まつ乃の席せき
ま三さん席せきありしと名なしありしといへる

○屠と見みハハえしりし門かど高たか乃の屠と居いるそれあり
鷹とらの餌えさありしとるふありしとえしりしといへる
えしりしとあやまりしとえしりしといへしりしとりあ穢け多た
乃の字しと旬しゆんゆる本もとふりりゆと或人あるのいへる

○禁きん中ちゆうありし月つき乃のあふか中ちゆうとるふし
しりしりしと酒しゆ乃のふととるふし本もと乃のりしりし
自みづかりてもたつとさうてしりしりしりしりしりし
○内うち裏うらとるふしりしりし乃の病やまひとさうてしりしりし

○山やま崎さき國くに紀き伊い郡ぐんおさしの里さとあり之この代よ実まこと深ふか自みづか観かん十
三年しゅうねん国くに八月はつげつ割わりおる乃の地ちとさうてしりしりし
下した佐さ比ひ里り上かみ佐さ比ひ里りあり物もの曰いは伴ばん乃の是こゝ乃の地ち乃の地ち

交まじりて海うみに柳やなぎふあらしり利根川りねがわ乃下流のりゅう
漫漶まんかしと大氷おほいひと氷こほりと結むすみ海うみに似にたり今昔いまむかしの
かゝるふらまを海うみとあやゆらハ地ち理りと知しる
さふり

七九 小野小町おののこまち零あまれ歌うた集あまふあま

子こ子こ振ふ神かみもいささハたらしらる

この川がは戸とのむぐらあけあえ
さりとてはましく天あま下くだ乃の奇きえり世より
はるるるる海うみ奇きと志しる人ひとさくね

小窓間語卷之二 年

